

ゼルダの伝説 ～黄砂の双剣～

ロジックす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生先は、ハーレムだった。

——と思ったらゲルド族やんけここ！

ゲルドの王子に転生した世界最速 RTA プレーヤーと、彼を取り巻く人々の物語。

ゼルダの伝説ブレスオブザワイルドをベースにしていますが、ところどころ詳細が語られていない設定などは、妄想で補完しています（過去の歴史やゲルドの風習など）。

時代設定的には、ブレスオブザワイルドのゲームクリア後100年後です。設定はベースにしていますが、オリキャラしか出てきません（おそらく）。

当面不定期な投稿になると思いますが、よろしくおねがいします。

目次

007		外の世界		23
006		出立前夜		19
005		長老会		15
004		二人の王子		12
003		禁欲！禁欲！		9
002		災厄の部族		6
001		転生先はハーレム		3
000		世界最速の勇者		1

000 — 世界最速の勇者

唐突な話だが、君は RTA というゲームプレイスタイルを知っているだろうか。

Real Time Attack — つまりは、とあるゲームを、どれだけ素早くクリアできるか。その一点のみに焦点を絞り、または別途レギュレーションを定めた上でおこなわれる競技のことだ。

そして、俺が今から、伝説となる競技でもある。

『やべえ』『マジかよ』『いつちゃうんじゃね』

うるせえ。黙ってる。手の震えが止まんねえだろ。

普段より数段粗野なことを考えながら、それでも手を止めない。もしこれが達成できたら、できる、失敗しなければ、ああダメだ。震えで指が、汗が。

残り時間はあと数分ある。しかし。

「早くッ！早く撃つてくれえッ！ガノン！」

輝くレーザー光、距離も、タイミングも頭に入ってる。タイミングよく——

「っしやー！」

パライしたレーザーは、吸い込まれるようにガノンの顔面へ吸い込まれ、大爆発を起こした。よし、これで。

「あとは……あとはー！」

最終形態を片付ければ……

29時間、59分、39秒。

流れ行くスタッフロールも、まともに目に入ってこない。配信サイトのコメント欄はとんでもないことになっていて、日本語も英語も、見たこと無い綴の文字もが俺を祝ってくれている。

ゼルダの伝説、ブレスオブザ・ワイルド。このゲームの100%（完全クリア）RTAで、俺はいま、世界一位のレコードを叩き出した。

誰もが無理だと諦めかけていた30時間切りという、大偉業付きでだ。

あとはこれを記録サイトに動画付きで申請するだけ。検証のレビュー時間はかかるだろうが、いや、すでにこの配信を見てくれるかもしれない。それならすぐにでも申請は許可され、レコードテールの最上に俺の名が刻まれるだろう。

たかがゲームの記録で、と笑われるかもしれない。でも、俺にとってはここ数ヶ月の人生ほど、生きた心地と『野生の息吹』を感じた瞬間はなかったと言ってもいい。

魅力的なキャラクター達、創意工夫で倒せる敵。いくつも見つかる新たな技法。そのどれもが、俺を引きつけて止まず、ついにはこの100% RTA をノーカンペでクリアできるほどのやりこみにさせてしまった。

仕事に打ち込むのもいいだろう。趣味に打ち込むのだって好きだろう。恋に燃えるのだって自由だ。それなら俺は、俺はこのハイラルを最速で完璧に救うことに、命を注いだのだ。

とはいえ、完全に無理をしすぎた。スタッフロールに流れるハイラルの景色が視界からかすれる。そりやそうだ。もうこれで4走目。ぶっ続けで120時間以上プレイしてる。視界だって……薄れる……さ……

「うお、やべー」

「なになに、どしたん」

「ブレワイやりすぎて RTA 一位の人死んだらしい」

「ウケる。死ぬほどゲームやるやつとかマジいるんだな」

「いや、でもこの人マジすげーのよ。動画見てみ。クソ速いから」

「人生まで加速せんでもなあ」

001 | 転生先はハーレム

ハロー、負け組のみんな。まだ地球で負け犬ライフ送ってる？

俺？俺はね、RTA で世界最速取ったと思って寝落ちしたら、次の瞬間赤ん坊になってたわ。マジ笑えねーよ！と思っただのも束の間。赤子らしく食っちゃ寝食っちゃ寝でおもしろおかしくくらしたら、3才ぐらいになって自由に歩けるようになったその日に気づいちやったのよね。

あれ？ここハーレムじゃね？って。

完全勝ち組ライフに突入したマイ・ファミリーを紹介しよう。こっちのゴツイ金髪筋肉ダルマが、俺のパパでアゲート。傭兵団の団長をやつてて、この街にはたまにしか、しかも夜しか帰ってこない。んでこっちの褐色激エロナイスバディの赤髪が俺のママで、アイオラ。

なんかね、この街のまとめ役？偉い人？らしくて、普段の生活とかでもメイドっぽい褐色美人が超お世話してくれる。

俺の横で寝っ転がってるのが双子の兄貴、コンゴ。んで、そっくりな顔してんのが俺、モンドくん3才ってわけよ。

とにかく実家は超金持ちっぽくて、屋敷はクソ広いし、メイドっぽいお姉さんはめっちゃいるし……というところが重要なのだが、うちに入入りするメイドっぽいお姉さんというのは、何も麗しいお姉様方だけではない。婆さんから少女くらいまで様々だ。

近所の子どもたちだって、安心して遊べるようにと我が家の屋敷に来て、これまた無駄に広い庭で遊んでいるのだが、そこには女兒しか来ないのだ。そう、男子不在。

そうして思い返してみれば、俺は兄貴たるコンゴとパパであるアゲート以外の『男』に出会ったことがない。しかも遊びに来る女兒達は何故か俺ら双子を全力でヨイショしてくれるし、ませてる子だと『将来結婚しようね♡』みたいなことを余裕で言ってくるのだ。

やばくない……？やばくない?! 人生勝ち組確定してない?! 男の居ない土地に男として生まれ、実家が金持ちって、転生先には最高じゃない!?

いやー、フィクションのハーレム転生とかバカにしてたけど、マジ全然関係ないね。最高。みんなもこういう転生できるように、現世で頑張ったほうがいいよ。RTAとか。

なんで前世の記憶なんて持つてるんだろう……と悩んだ時期も、2才頃にはあつたが、悩んでもわからないことしかわからないし、こんな最高のハーレム環境だ。前世なんて忘れて、現世を楽しむべきだった。

そう思っていたこの頃の俺を、どうして責められようか。

「コンゴくんー、モンドくんー、あそびましょー」

微妙に舌足らずな間延びした声が、外から聞こえる。

「あ、ああ！あとで行くから！」

「ダイア！先に行つてくれ！」

俺たちももう6才。はつきりと返事ができるようになったが、幼馴染の彼女はまだ舌足らずだ。

とりあえず返事はしてみたものの、いつになるかはわからないだろう。

目の前で、静かにあぐらを組んで瞑目するコンゴは、いつもの数倍険しい雰囲気だ。

そりやそうだ。夜中にリビングから聞こえてきた、母の泣き言と、慰め、励ます父の言葉を理解できないほどアホな俺たちじゃない……それどころか、俺より理解の早かったコンゴに速攻で口ふさがれたくらいだ。

「……やっぱ、俺たち、不吉なのかな。コンゴ」

「……そんなこと、ない。とは、言い切れない」

双子なだけなら、よかった。

男児なだけなら、よかった。

どちらもなのが、だめだった。

母は、そういつて泣いていた。

「王の伝説を知ってるか、モンド」

「ばあちゃんがたまに言うアレ？」

偉大なる部族の王。100年に一度のみ生まれる男児はすべから
く王であり、王は世界に部族の名を轟かす。

長老会のばあちゃんらがいつつもみんなに聴かせる、王の伝説。歴
代の王たちは確かに凄かった。

宝石の細工を生み出し部族に大きな富をもたらした宝飾王。

砂漠の地においてなお馬と女を鍛え傭兵団にした軍王。

隣国や近隣部族との和平をたった一人で終わらせた賢王。

王たちの伝説はいくつも残っているが、ここ数百年、新しい王は生
まれていない。

そこに生まれた、双子の王子。

「やっぱ、ヤバイ流れなのかなあ」

「長老会とか嫌がってるらしいな」

4才になる頃には、周りの年上女子やお手伝いさん達は俺たちを様
付けで呼ぶようになってきた。

それはまあ、部族のしきたりだ。俺たちのうちどちらか、それとも
どっちもが王になるんだろうってのは、間違いない。

まあ、俺としては王様とかされても困るし、むしろ王の弟とかでゆ
るゆる楽しくハーレムやってられりやいいんだが……

「ゲルド、ゲルドの王か……」

「なんだモンド。今さら……」

ゲルドの王は、やべえんだよ。兄貴。

002 | 災厄の部族

まあ、確証がないもんにビビっても仕方ない。

前世の記憶がガンガンに警鐘を鳴らしているが、それでも確かめないとうとうがないんだ。

まず間違いないのは、俺が転生した先は、ただのハーレムでもなんでもない、ハイラルの大地で。しかも間の悪いことにゲルドの王子だつてこつた。

あとは、今この時代が。いつかによるんだが……

「お、おい、モンド。大丈夫なのか、勝手に入って」

「バレたらダメ。バレなきや無罪。柔軟にいこうぜ」

結局、遊んでられるような精神じゃいられなかった俺たち双子は女兒達の誘いを断って狸寝入り（といいつつ結局寝落ちした）を決め込み、深夜にこうして抜け出した。

長老会のババアどもの目をかいくぐり、今は部族の資料が収められた資料庫までドロボーしにきたって寸法だ。まあ、本を持ち出したりはしないが。

「モンド。規律を守ることはバレなきやいいなんていうことは……」

「兄貴頭固すぎだよ。マジで。大丈夫だつて、ちよつとした勉強さ」

コンゴは本当によく出来た男で、誰に対しても公平で、驕ったところがない。

真面目一辺倒みたいな奴だが、できの悪いやんちやな俺にも付き合ってくれる、最高の相棒だ。

4才くらいの頃には俺のほうが精神年齢は上だぜと兄貴風を吹かしてみたものだが、今となつちや十二分にしっかりしちやつてまあ、すっかり未来の王様だ。

とはいえそこは流浪の民でもあったゲルド族。俺みたいなちやらんぼらんも、それはそれで魅力的には見えるらしく、気風の違う二王でいいじやんの空気は皆からビンビン感じてる。

でも、多分ダメだ。それは、まずい。

「いくぞ、兄貴。静かにな」

「……わかったよ。モンド」

資料庫は古い本のカビの匂いに、埃がたくさんな空気で、黄砂の風に慣れた俺たち二人でもちよつと涙ぐむぐらい息がしづらい。

とはいえ、お目当ての本は一発で見つかった。なんせ、今日も今日とて誰かが調べてましたって具合に、資料庫の机には俺たちの求める本が広がってたからだ。

「あつたよ兄貴。『凶王歴』だ」

「なんだそれ。『凶王歴』って」

頭の奥で警報がビービー鳴りまくってる。いますぐ回れ右してお家に帰ってママに抱きつきたいが、そうもいかない。コレを見ずには、帰れない。

「『凶王、ガノンドロフ。ゲルドの汚点にして、過去最凶最悪の王』だつてさ」

「ガノンドロフ？そんな王、いままで聞いたこともないぞ。それに不吉な名だ」

そりやそうさ。兄貴。

「歴史から消したいくらいヤバイ王様だよ。なんせ……」
「なんだ、もつたいぶるなよ。モンドは知ってるのか？」

——あの厄災ガノンの、元になった人だもん。

今を遡ること、数百年前。

ゲルドに生まれた強く、野望と愛に溢れた男。ガノンドロフ。

彼は、ハイラルの肥沃な大地を自らの部族に捧げんと、ハイラル全土に対して戦を仕掛けた。

自らの配下のみを率い、ついには部族すら切り離して、闇の者となり、魔をも操りハイラルを地獄の戦火へと導いたのだ。

ついに現れた勇者をも退け、しかし賢者たちによつて封ぜられたかの魔王。

それでもなお、恨みと強欲のみで魔力を操り、ついには意思なき厄災となって、この世に戦火を振りまいた。

そんな厄災の王も、つい100年前に回生の勇者とハイラルの巫女

姫によって討伐されたのだ。

如何に他の部族が、種族が許そうと、ゲルドの民は忘れてはならぬ。我々は過去に、大きな過ちをこの世に生み出したのだ。

我々はすでに、この血と魂に呪いがかかるだけの、闇を孕んだのだ。

「闇を、孕んだ……」

「ゲルドっぽい話だ」

女ばかりが生まれるゲルドでは、悪しきものを生み出したり、作り出すものを『闇を孕む』とよく言われる。まあ、血統的に女系で、外の血を取り込み続けてなお色濃くでるゲルドの血は、よく言えば伝統的で、悪く言えば呪いのようだ。

しかし……歴史を見る限り、どうやらこのハイラルは『ブレスオブザワイルド』の後だ。俺が知ってるハイラル史で言うなら時の勇者の敗北後だから……神トラとか、あの後の時代だろう。

それでも『数百年』とかぼけぼけなのは、まあ多分、この文明にしっかりと暦を記録する仕組みがないからだろう。それでよかったのか、あるいは、幾度か暦を書き直したのか。

理由はわからないけど、とにかくガノンドロフは過去に居て、その後厄災ガノンが死んで初めての王子が俺たちなわけだ。

「……兄貴。やっぱ、俺たちダメかも」

「……何を見つけた。モンド。見せろ」

あつてくれるな、あつてくれるなと思っていた記述を、俺は見つけてしまった。

ツインローバ。ガノンドロフの乳母にして、世話役にして、幹部。そして、最悪なことに『闇を孕んだ双子』だ。

ただの王子なら、吉兆だ、凶王の呪いは終わったんだと喜べたかもしれない。

ただの双子なら、吉兆だ、また新しい子が生まれたぞと喜べたかもしれない。

でも、この2つがそろって出てくるのは、ダメだ。

003 — 禁欲！・禁欲！

俺たち双子が、自分たちの『ヤバさ』に気づいたあの夜から、もう8年が過ぎた。

14才。前世の地球じゃまだまだガキの扱いだ、こつちじゃ十分大人と同格に見られるくらいだ。体つきだっただいぶ男らしくなつたし、筋肉もがつつりついてきた。

さすがは女だけでも余裕で傭兵団をやれるゲルドの血は伊達じゃなく、俺も兄貴も、剣術棒術体術と、肉体周りならなんでもござれのスポーツ万能っぷりだ。

まあ、俺ら双子はあの夜以降、徹底的に自分を鍛え始めたつてのはあるんだが。

あの夜、こつそりと寝室へ戻った俺たちは二人でひつそりと話しかつた。

一つ。どちらかが王になる時、どちらかは部族を捨て、出ていくこと。

二つ。その時は、周りの意見を全部無視して、俺たちだけで王を決めること。

三つ。闇を孕むようなことのない、健全な肉体と精神をその時まで用意すること。

俺から言い出したんじゃない。全部兄貴から言い出したことだ。俺はもう、それを聞いた時点で出ていこうって思ったぐらいだが、甘えるなど兄貴に叱られてしまった。

俺たちは災厄の未来を背負ってるかもしれない、危険な王候補だ。それなら、俺たち自身がまともになって、そんでもって、災厄に近そうな双子って要素だけでもどうにか排除しようって寸法だ。

勝手に決めちゃったけど、それでもこの事実は知ってる人が少ない方がいい。だから俺たちは、誰にも悟られないように、皆の不安を晴らすように、模範的で誠実な王子であり続けた。

部族の皆が、俺たちの家族が笑って過ごせるように。これ以上、俺たちの部族に、悪い歴史が積み重なることのないように。

「モンド様ー！あーっそびーましょっ！」

元氣な声で俺を遊びに誘うのは、俺たちと同年のダイアだ。これまたゲルドらしい赤髪なのだが、目鼻立ちがくつきりして大人びて見えるゲルドの中じゃ、だいぶロリっぽいというか、幼い顔つきの少女である。

それでも、最近はお出るところは出てきて結構目の保養——いやいや、目の毒だ。

自覚する精神年齢では完全におっさんなはずの俺も、肉体の性欲には抗えないようで、精通も済ませた今となつては、周りの女子達が気になつて仕方がない。

兄貴なんかは澄ましてるけど、俺にはわかる。やつだつて相当のスケベだ。

「ダイア。俺も兄貴も今は勉強中なの。お前だつて巫女の修行があるだろ」

「そうだぞ。ダイア。しっかりと修行することで巫女としての役割を……」

「ええー……。だつてだつて、お二人とも最近全然皆と遊ばないじゃないですか！」

そりやそうだよ!!

ゲルドは基本的に一夫一妻制で、妻は夫に尽くすもの、というのが決まりというか、風習なのだが、ゲルド王は違う。完全に一夫多妻制だ。その気になりや、部族の女全員困うとか言い出したつてやれるだろう（というか、歴史上すでにいた）。

だが、俺たち双子は将来的にどっちかは出ていくつもりなのだ。それまで、変に火遊びなんかはできない……俺はちよつとくらいいいんじゃないかと思うが、兄貴がクソ真面目で、俺だけつても違うなど、我慢している。

そんなセルフ禁欲に突入している俺たちに、ゲルドの女たちは全然容赦がない。

まずもつて女だらけなせいで胸チラパンチラは気にもとめてないし（そういう作法は、媚探しの旅の前に徹底的に仕込まれるそうだ）、

砂漠の熱で健康的な汗を流す美少女たちは、見てるだけでも俺のマス
ターソードが唸りをあげちやいそうなのだ。

「むー、やっぱり王子たちは堅物です」

「いやいや、俺なんかは結構柔軟な方針よ」

「お前のは適当というんだ。大体だな……」

兄貴の説教が始まり、俺がしゅんとうなだれる。それを見ているダ
イアは、なんだか嬉しそうにニコニコと俺達を見ていて、ムカついた
のであつかんべーとしたら兄貴に見つかってまた説教が伸びる。

いつしか兄貴も半笑いで、俺も笑いだしてて、ダイアも笑って。そ
んな笑い声に釣られた同年代がわらわら集まったせいで、結局遊ぶこ
とになっちゃって。

そんな日々が、ここ数年の俺たちの日常だ。

あつ、でも夜中にこっそり抜いとかないと……って兄貴！お前もか
よ！

004 — 二人の王子

「……ツタア！」

「グツ、フン！」

今日も、王子たちは二人で鍛錬を繰り返しています。私はダイア。次期巫女となるべく、今もお友達の皆と一緒に修行中です。今の巫女頭である王子たちのお母さん、アイオラ様にいろんなことを習っています。

「ンンンン、オオリヤア！」

「グググググ……ヌリアツ！」

大きな両手剣方の木剣で大立ち回りをするお二人、私なんかじゃ持ち上がらないあの木剣がそこらの棒きれのように飛び回る姿は、見ていてドキドキする速度です。

修練場の周りでは、私のような女の子たちが、何人も熱い視線を送っています。

そう、王子たちは、モテモテです。

「コンゴ様ーっ！」

修練を終え、水浴びに向かうコンゴ様に、女の子たちが我先にとタオルを手渡しに行きます。

そんな女の子達に軽く手を振りながら笑顔を振りまくコンゴ様は、まるで貴公子です。

「ありがとう、いつもすまないな」

「いえっ、いえっ、そんな！そんな！」

タオルを受け取ってもらえた子はもう顔真っ赤です。髪の毛より真っ赤になってて、なんだかリンゴみたい。

「顔がやけに赤いが、大丈夫か？熱などないだろうな？」

なんて言いながら、額に手なんて当てちゃうから、もうあの子はオーバーヒート寸前です。コンゴ様……あれ天然なのかな。

真っ赤になってアワアワする彼女に、コンゴ様はタオルを水に浸し、軽く絞ってから頭に被せてあげていました。

普段はキリツと冷たい表情だけど、ああやって誰にでも優しくして、

いつでも私達を気にかけてくれている。氷の貴公子と名高いコンゴ様は、主に年下の女の子や同年代に大人気です。

「モンド様ー!」

「おおー、投げてよこしてくれよー!」

よく冷えたヒンヤリメロンを危なげなくキャッチしているのはモンド様。コンゴ様とは双子なのですけど、何故かいつも「俺のほうが弟だよ」と笑ってらっしゃる、いつでも笑顔な方です。

コンゴ様に比べるととっても親しみやすく、今もタオルを持って駆け寄った女の子達に、ヒンヤリメロンを切って配りつつ、ご自分もガツガツとお食べになっています。

とっても明るく、気さくで、それでいて実は誰よりも細かい気配りの出来る方。

「おっと。だいじよぶか?怪我してないだろうな?」

「うん、だいじょうぶ。ありがとーもんどさま」

「おうおう、美人に育ったら俺に恩返ししてくれよー」

今もああやって、人だかりにぶつかりかけた女の子をさらつと助けちゃうところが……ずるいです。

昔から、とっても快活なのにふとした瞬間に大人のような冷静さや聡明さを見せる方でした。

「おっ、ダイアじゃん。なんだー、サボりかー?」

「そっ、そんなことないですー。休憩ですよー!」

「そかそか、ならコレ食ってもいいな」

そういつて私をからかって、ヒンヤリメロンを一切れ渡してくれたモンド様は、女の子に囲まれながら笑って去っていきました。

太陽のような金髪に、案外熱血で、肝心な時は周りがゾツとするほど冷たい目を見せる様子は太陽の王子と呼ばれ、大人のお姉さまたちや、やつぱり同年代の女の子に大人気です。

「ウチのやんちゃどもは、ちゃんと鍛錬してたかい?」

神殿に戻れば、アイオラ様にそう聞かれて、休憩中に王子達を見に行ったことがすっかり筒抜けで、ちよつぱり恥ずかしい思いをしまし

た。

「はい、もちろん。お二方とも本日もしつかりと……」

「ハツハツハ。ダイアも今更畏まる間柄じゃないだろう」

「でも、お二人とも次期王ですから。前みたいにくん付けじゃ呼べません」

「……そうだね」

アイオラ様が、少しだけ遠い目をしています。

「あの子達が生まれて、本当に嬉しかった。けど、なんだか二人に、とんでもないものを背負わせちゃった」

「そ、そんな、ゲルドのみんなが支えます。ご安心を」

「そうじゃないんだ。多分、私達に伝えてくれない、なんだかおつきなことを、あの二人はもう決めちゃった。男つてのは巢立ちが早くていけないね」

寂しそうに笑うアイオラ様は、それでもどこか誇らしげで、私もそんなアイオラ様と同じ気持ちなんだと思うと、ちよっぴり嬉しくなりました。

昔からあの二人はどこか私達ゲルドの女と違うなって思ってたけど、数年前から、より精力的に自分たちを高めることに手を抜かなくなりました。

長老会のおばあちゃんたちは、そんな王子たちお気に入りみたいで、よく長老会にも顔を出しているみたいです。

私と変わらないのに、部族の長達と話をしているお二人を思うと、置いて行かれたような気持ちになって、すこし寂しくなるけど、かっこいい二人が幼馴染なんだって、誇らしくもなります。

「わたし、私も、頑張ります！」

「そうだね。じゃ、サボってきたわーい巫女見習いを仕込むとしますかね」

脅す時に釣り上げた目が、コンゴくんそっくりで。

その後に笑いかける笑顔が、モンドくんそっくりで。

私もつられて、笑顔になりました。

「かーっ、めんどくせー」

「モンド、無礼だろうが」

今日も今日とて絶好調に炎天下なストリートをあと4ブロックも行けば、長老会の寄り合い所だ。

別に行ったからって何させられるわけでもなく、ばあちゃん達の愚痴やら、決め事の話やらを聞きつつ、たまーに意見を求められたら答えるぐらいの仕事なので、大変な用事つてわけじゃないんだが、どうにも気に食わない。

「コンゴは気になんないのかよ。昔はあんなに邪険にしてきたのによ」

「むしろ、だからこそ俺たちの約束が功を奏している証明だと思える」
6才のあの夜。すべてに気づいたあの日から。周りを見渡してみりや、そりやあもうわかりやすいくらいに長老会のばあちゃんたちは俺たち二人の敵だった。

おふくろが巫女頭じゃなきや、下手すりや毒殺か事故死に見せかけてどつちか殺されたんじゃないか、つてぐらい、男で双子な俺らを、ばあちゃんたちも危惧していたのだ。

やたら家にお手伝いが多いなと思つてたけど、アレは案外おふくろか親父が用意したボディガード的なもんだつたんじゃないかと勘ぐるぐらいだ。

しかし、それも昔の話。

兄貴との約束で、模範的で精錬潔白な王子として数年を過ごすうち、長老会はむしろ二王であるべきだみたいなテンションで、いつのまにやら災厄の双子なんてワードはどこからも聞こえなくなった。つまるところ、ばあちゃんたちも俺たち二人を認めてくれたつてことで嬉しくはあるんだが……

「それでもびみよー」

「……まあ、俺もだ」

じゃらり、と音を立てる、宝石が連なったカーテンをくぐれば、連

座に座ったばあちゃん達が、よく来たねえと言いつつ歓迎してくれる。

ばあちゃん達はいいけど、ここ香を炊きすぎなんだよな……

「失礼いたします」

「おじやまするぜ」

兄貴はシャキつと姿勢良くあぐらで座るが、俺は片膝を立ててラフに座る。

別に、無礼をしようってわけじゃない。ただ、なんというか俺はそのほうが『様になる』のだ。取り立てて意識していないが、俺の性格や普段の言動が、こういうちよいだらな姿勢のほうがよりよい王子に見えるらしい。

綺麗潔白じゃなくなつて、映えてりやオツケーつてところが、なんともうちの部族らしい価値観だなと、今更ながら地球との違いに思い至ってしまう。

「……皆、集まったようだね。今日は重大な話がある。心しておくれ」
まとめ役のゾイばあちゃんが、重々し気に口を開く。普段は大抵、街の収支や各傭兵団の状況。各地に散ってる婿探し中の同胞から入った状況の共有ぐらいだが、重大つて言うんだ、なんかしらあるんだらう。

「ハイラル王家からの、盗みの依頼だ」

わお。マジ重大。

ゲルド族には、いくつかの生業がある。

一つは、ゴロン族やハイラル族から買い入れる宝石の加工だ。

原石そのままじゃ、どんな宝石も輝かない。火と砂、そして太陽に愛された俺たちの部族だからこそできる、緻密で、美しい宝石加工技術。

もう一つに、隊商や旅人の護衛をする、傭兵団家業。ゲルドの女は強くて元気。しかも部族柄、どいつも旅慣れてる事が多いし、旅に出ることを嬉しがる奴も多い。

子育てが部族ぐるみな要因もこの辺にある。母ちゃんが護衛に出

ちまつて一年帰らないなんてのは、ゲルドじゃよくある話だ。だから、俺たちは部族で子供を育てる。

農業だ、畜産だつてのももちろんあるし、こうして長老会をするような奴、金勘定してるやつ、巫女達だつて立派な職だが、ゲルドの外と関われるメインの仕事は、やっぱり先にあげた二つだろう。

だが、それだけがゲルドじゃない。古来から続く、歴史の裏で俺たちが活躍してきた大仕事がある。

そう、義賊業だ。

「依頼主はハイラル王家直轄の手のもの。ありや多分シーカー族だね」

「なんだい、ここまで来てのご依頼なのかい」

「ああ、ご丁寧に。別嬪だったよ」

ゾイばあちゃんちに直に来たのかよ。どんなダイレクトメールだ、ハイラル王家。

ばあちゃん曰く、依頼はハイラル南東に位置するアデヤ市における、市長の不正の証拠を盗み出して欲しい、ってことらしい。

徴税から見ても、住民の様子から見ても、明らかに市長がどっかの悪いヤツとグルで不正をやってんのは間違いなさそうなのに、どうにも尻尾がつかめない。

かと言って王家直属の隠密部隊を動かすには、どうも人手が足りんらしい。

そんな市長が最近どうにも高飛びの準備を始めてる気配もするつてもんだから大変だ、てことで我々が部族に白羽の矢が立った。というのがことのあらましだ。

「具体的に何をやっているか、検討はついているのか？」

兄貴は基本義賊業には反対つてポジションだ。なんせ、普通に考えて危ない。

金のためつてんならある程度稼げてるんだから、無理に引き受けるのはよそうぜつてスタンスだが、そこは黄砂の風吹くゲルドの気風。太陽と砂の黄色いうちは、悪徳野郎が蔓延る道理は砂一粒もないつて

もんだ。

「横領にピンはね、借金を被せて娘を鼻肩にしてる娼館に売り飛ばしたり……」

「よっしやぶちのめそう。顔面オクタロックにしてやる」

俺が拳を打ち合わせてそう宣言すれば、ばあちゃんたちも然りと首を縦に振る。

兄貴も内容を聞いてしかめっ面だ。そりやそうだ。女子供に手を挙げる奴はゲルドの敵だ。いや、ゲルドじゃなくても普通に敵だ。

「それでだね、この仕事、王子達にも参加してほしいと思ってるのさ」
よし、ゾイばあちゃん。てめえも敵だな？

考えてみれば、生まれてこの方、兄貴とこんなに長く離れるのは人生初な気がする。

ゲルドの子育ては街ぐるみだ。その上、外部の客だって特別中の特別な男以外は女しか入れないような土地だ。

そんな街中で、俺たち双子はなるべく秘匿され育てられてきた。極秘ってわけじゃあ無いが、外の客にはなるべく引き合わせられないように守られてきた。

なんせゲルドの男は実質的に将来の王だ。どんな悪いヤツが取り入ってきたっておかしくない。

そんな、ゆりかごのような温室ならぬ熱砂の上で、俺たち双子は、実に14年、二人で暮らしてきたのだ。

「んじや、俺が行くよ。ばあちゃん」

「モンド、何を勝手に決めてるんだ」

兄貴が驚いたように止めてくるが、知らぬ存ぜぬで無視だ。

大体、俺たち二人はまだ14才。婿探しの旅が認められるのだから16才の成人からだったのに、今俺たちを出そうとするなんて、絶対におかしい話だ。

でも、多分これが試験なんだろう。

長老会全員とは言わないが、まあゾイばあちゃんは間違いなく、俺たち双子の危険をまだ忘れ去ってない。ここらで一旦引き離して、一人づつ見極めたいってのが本心だろう。

なんて、気取った推理を試してみたが、剣呑に光ってるゾイばあちゃん目の目を見る限り、あながちはずれってこともないらしい。

背中に冷や汗をかくが、おくびにも出さず、俺は言い切った。

「兄貴はどうだか知らないが、俺はそろそろ街の外が見てみたいのさ」「何を言ってるんだ。それなら俺だって外は見てみたいといっただって」

兄貴はまだ事情が飲めてないみたいだが、どうせ結果はどっちか一

人だけだ。多分、二人共参加しろって話じゃない。

「こういうのは早いもん勝ちさ。それにどうせ定員は一人なんだから？」

「何を……そうなのか？ゾイばあさん。俺たち二人共ではないのか？」

「モンドは飲み込みが早いねえ。そうさ、さすがに子供二人連れちゃあいけない。どっちか一人に、仕事を体験して欲しいって話さ。将来のためにもね」

何が将来だクソババア。引き離したいだけだろ。

だが、見込みはやっぱり間違ってる。どっちかだけを連れて行くってんなら、やっぱり行くべきは俺だ。

……もし、まかり間違ってる、ばあちゃんの見極めに敵わなかったとして。消しやすいのは街の外にいる方だ。兄貴をそんなところに行かせるわけには、いかない。

「じゃ、早い者勝ちで、俺ってことで、頼むよ」

「モンド、お前な、せめて話し合いをしてから」

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ、諦めなコンゴ。今回の旅券はもうモンドで決まりさ。目ざとい子だよ」

この懸念は、兄貴にもバレるわけにはいかない。全部を隠し通して、俺は街を出る。

覚悟なら、8年前のあの日に、とうの昔に終わってるんだ。

「いよいよ明日出立か」

「一人寝が寂しいか？」

ニヤついてそう聞けば、兄貴はちよつと怒った顔で俺に詰め寄る。おいおい、やめろよ、俺似の美形が寄ってくると面食らうんだから。

「何を考えてる。あれは罠だぞ」

「おっ、ついに気づいたな鈍感」

さすがナチュラルボーンな天才だ。俺みたいの下駄はいてやっこの不出来な弟とは根っこが違う。兄貴も俺たちを引き離すためのあのからくり気づいたらしい。

「……今回は、もういい。あの場で気づけなかった俺が悪い。だが、次は俺だ」

「モチのロンだぜ。そう何度もやられてたまるか。コイツは貸し一つって事で」

そう言つて拳を突き出せば、兄貴も拳を合わせてくれる。

正面から向き合えば、俺たちはまるで鏡のようだ。見慣れた金の長髪も、ゲルドにしちや白めな褐色の肌も、つり上がった目も。

俺たちの約束と誇りは、いまでも胸にしっかりと根付いてる。いつか、こうして一時的にじゃなく、人生の波が終わるその日まで、離れる日だつてくるだろう。

そうなつたつて、俺たちはいつでも一緒だ。鏡のように、表裏のように、常に相手を側に感じていられる。

「旅程はどれほどになりそうなんだ？」

「んー、仕事次第だけど、一ヶ月かな」

観光旅行じゃないんだらか、行って戻つてハイおしまいとはいかない。俺たちの試でもあるが、れつきとしたハイラル王家からの仕事でもあるのだ。ヘマはできない。

というか、ついに、ついに俺はゼルダのキャラたちに会えるんじゃないか？ いや、すでにゲルド族というゼルダキャラには十分会ってるんだか、とにかく街中女だらけなだけで、全然キャラに会った感じがないんだよな……

「……ダイアが、寂しがるだろうな」

「どつちが出たつておんなじだろう」

まだ、街中のお姉ちゃん達が寂しがると言われたほうがわかるぐらいだ。ダイアのことだ、俺だろうと兄貴だろうと、どつちが出ても盛大に寂しがるにきまっている。

「なんだ、気付いてないのか？」

「なんだよ、やけにからむな？」

訝しがって兄貴を見れば、まるで先程の意趣返しのようにニヤニヤと俺をからかうように見つめてくる。

「フン、せいぜい悩むといい。鈍感」

「なんだとテメー。土産はナシだな」

そういつて笑いあつた俺たちは、どちらともなく外で見てみたい部族やモノ、仕事先の話をしながら、眠りについた。

ヴァーサーク！兄貴、元気でやってるか？俺は最高に疲れてるぜ。旅に出てみて驚いたのは、ハイラルの大地は最悪だったことだ。昼寒く、夜暑い。というかまあ、砂漠は昼間クソ熱くて、夜はキンキンに冷えるからだが、それに慣れた俺らの体には、これは応える。毛布置いていけて親父が言った意味がよくわかったよ。

俺たち義賊団は総員10名の、ちっちゃなチームだ。賊頭を今回勤めてくれるクールな美人がタンザさん。普段は街の衛兵の兵隊長をやってる。俺らも稽古つけてもらったことあるから知ってるか。

他の8人も、街の衛兵をやってくれてる姉さんたちだ。そんな屈強な戦士9名プラス俺1名。という10人で、親父の傭兵団に守られながら、行商って体で移動している。

まあ、実際に宝石その他は抱えてて、売り買いもやってる。『行商に見せかけるくらいなら本当に行商してしまえ』ってなもんだ。

旅程はすでに8日目。この宿場街を出れば、あとは少し山を登って、アデヤ市だ。

兄貴へ向けた手紙をしたためつつ、この旅程を思い返す。

始めてみた砂漠の外の世界。ゲルドキャニオンも、デグドの吊橋も、たしかに前世の知識通り存在した。

もちろん、ゲーム内みたいにならなかつた。ここまで馬でピューっと、つてな具合じゃなく、全然もつと巨大で、遠くて、呆れるほどのサイズだったけど。それでもこの東宿場街まで8日で来れるのは、俺たちが通常の隊商じゃなく、目的が別な強行軍だからだ。

8日の旅程のうち、実に6日が野宿だった。多少怪しまれる類の動きだろうが、関係ない。なんせ女性ばかりのゲルドの隊商だ。こういう時のカモフラージュも兼ねて、俺たちは普段からあまり宿場街や宿に滞留しない。宿で休んでたら勘違い男に部屋に押し入れられるなんてザラだからな。

俺はハイリア族に似た金髪ってこともあって、日焼けしたハイリア族だって押し通してる。赤い目はちょっと珍しいが、ハイリア族に

だつて居ないこともない。親父の傭兵団とはこの街でお別れだから、明日からは違う身分を用意することになるが。

「しかし、それにしたつて、コレはなあ……」

半笑いで掲げるのは、ゲルドの民族衣装……つまり、女モノの服だ。姉さんたちも最後までうんうん悩んでいたが、やっぱりゲルドの隊商に男が紛れてんのは旨くない。

なら、まあ、女装かなつて……一瞬俺も考えたけど、結局この案で行くことになつたみたいだ。

もちろん、砂漠を出てからいろいろ種族に出会つた。手紙を運んでくれるリト族や、各地に魚を卸に来てるゾーラの漁師たち。コログ族はまだ見れてないが、案外近くでかくれんぼしてるのかもしれない。

ハイリア族も、男も女も大人も子供も溢れかえりまくりだ。金髪か茶髪が多くて、たまに赤銅色の髪や、青い髪したやつだつている。日本の感覚じゃヘンテコだが、燃えるような赤髪を毎日みてる俺からすると、どの色もヘンテコだ。金だけはまあ、見慣れてるが。

こうして見ていると、本当にゲームなんてやつてんたんだろうかと、前世の記憶が疑わしい気持ちになつてくる。

確かに、俺はゲームとしてこの世界を知っている。でも、今、この人生で、ゲームみたいな無味無臭な奴に出会つたことなんて、一度もない。

ゲルドの家族だつて、モブキャラなんて奴は誰一人居ない。皆違うし、皆見分けられる。俺たちみたいな瓜二つの双子だつて、普段の様子を知ってるやつなら間違いなく見分けられる。

俺は今、この世界に生きてて、大事な家族と過ごしてるんだ。

だからまあ……女装は、受け入れるしか、ないよな。

「モンド、入つていいか」

「えっ、あつ、親父？待つた！」

待つたつつてんのに開けるなや！と思いつつも、とりあえず羽織ろうとしたローブを取り落とし、結局女装の試着姿のまま、俺は親父を部屋に引き入れた。

「ククク、存外似合ってるじゃないか、ええ？アイオラの若い頃によく似てるよ」

「そりゃどーも」

親父はひとしきり爆笑して落ち着いたのか、部屋にある小さな二人がけのテーブルを顎で指す。座れってことだろう。

「どうだ、うまくやれそうか？」

「まあ、ここまでは。潜入担当にされることはないだろうけど、そうならそうなら」

なにもドンパチ起こしに行くわけじゃないが、情報は足で稼ぐもん。粗方の目星をつけるためにも、俺たちは街にいたら全員で散り散りに行動し、情報を集めることになる。

目星がついたら市長殿のお館に忍び込んで、ありつたけかつさらっておさらばする寸法だ。引き渡し場所の仔細は聞いてないが、クライアントに連絡する方法くらいはあるのだろう。

「それだけじゃない」

親父が、真面目な顔をする。

多分、両親ともわかつてる。俺たちが、何かを見据えて行動して、それをあえて誰にも言っていないことを。それでも深くは聞かず、こうしてたまに手助けが必要ないかだけを聞いてくれる。

正直、不義理な息子たちで申し訳ないな、と思う。それでも、俺たちは二人でやり遂げると決めた、決めてしまったのだ。そして多分、その方針は正しかった。

ゾイばあちゃん、たしかにやらしい試しをしてきたと思うけど、そうじゃなきゃもつと大々的になつてたはずだ。俺たちが二人で何とも言わないから、ゾイばあちゃんもこんな風に言い訳を重ねた上での試し程度で許してくれる。

もしこれで、俺たち双子が災厄の歴史をわかつてるなんてことがおっぴらであれば、知っていてなおも続けようとする俺たち双子は、もつと悪いものに見えるはずだ。

巫女頭のおふくろは多分、災厄の歴史を知っている。そしておそれ、その夫である親父だって。それでも、二人は俺たちに何も伝えず、

言わずにいてくれた。

だから、俺たちも俺たちが出来ることは伝えない。

「まあ、親父に頼むことは今んとこは」

「なんだ、この先なにかあるのか」

「妹は足りてるしなあ」

「……ませたこと抜かしやがって」

乱暴に頭を撫でる親父の手はデカイ。ほんとにハイリア族か疑わしいくらいだ。ゴロンの血でも入ってるんじゃないかってぐらい。

でも、かつこいい手だ。